

猛暑が梅雨を寄せつけないうちに、夏が始まってしまいました。今年も季節を感じる間もなく、気候が変動していきまます。すっかり季節に乗り遅れて、枯れていく紫陽花のような(笑)何か落ち着かない気分です。

カラ梅雨の東京とは打って代わって、あちこちで大雨が、濁流に山が崩れ大地が埋まっています。田畑を耕し、森や山を慈しんで生きていらした方達にとつて、土地が崩れ流されていくことは如何ばかりかと、言葉も見つかりません。

我が町、豊洲にも、さるすべりの花が咲きました。赤白の小さな花がたくさん。駅までの道を万国旗のように彩ってくれています。根無し草のようにたまたま住みついた、この街にも愛着が生まれ

### 土地への愛着

シャンソン歌手 友納あけみ

てしまうのに…先祖父代受け継がれ、守り、そこで生まれ、育ち、愛し続けた土地が崩れ埋もれていく悲しさは計りしることができません。東北での大震災、九州の地震、水害…本当に天

変地変が続きます。早く穏やかな日々が皆様に戻られることを、ただ、ただお祈りするばかりです。恒例の東北行脚…今年八月に岩手県の大槌町に行ってきました。未だ町のあちこちに傷跡が残る中で、助け合いながら未来に向かおう！となさっている皆さんの御姿に、深い感銘を受けました。



写真提供・高岡輝幸氏

### おはなし散歩道

## カラスのおやど

柏市 木村 研

「ひいばあちゃん部屋のぞいてみると、ひいばあちゃんが、押入れを大きくあけて、探しものをしています。」

「ひいばあちゃんはお父さんのおばあちゃんです。これまで田舎で、一人で暮らしていましたが、春から、ここねちゃん達といっしょに暮らすことになったのです。」

「どうしたの？」

「ここねちゃんが声をかけると、ひいばあちゃんは、『ハンドバックがみつからなくて…』」

「困ったようにいいました。」

「ハンドバック？」

「ああ、おじいちゃんにもらったハンドバックだよ」

「それって、うちに来たときに持ってた、ピースのハンドバッグ？」

「そう。それ、それ」

「そのハンドバックなら、朝、自分で虫干しするって、ハンガーにかけて、外に干しに行つたじゃない。わすれたの？」

「おや、そうだったかねえ？」

「ひいばあちゃんとは、ぼけて裏のもの干し場のほうに行きました。でも、ハンドバックは、どこにもありません。仕方がないので、ここねちゃんに、『お母さんが、しまったんじゃないの？』」

「いやね。わたし、知らないわよ」と、お母さんがいいました。

「じゃあ、泥棒がはいったのかしら？」

「ひいばあちゃんは、見つからないものがあると、すぐに、泥棒のせいにしてます。」

探しものは、日増しに



多くなつていきました。夏休みが終わつたある日、お父さんが言いました。

「ひいばあちゃんは、うちの中にばかりいるから、探しものするんだよ。だから、高尾山に登つてみよう」

「ハイキングね」

「ここねちゃんは、大喜び。大急ぎでひいばあちゃんに知らせに行くと、『登れるかねえ』と、心配そうにいいました。」

「だいたいよ。ケーブルカーがあるもの」

次の日曜日、ここねちゃんたちは、ケーブルカーのつて高尾山に登りま

した。

「ひいばあちゃんも、ここねちゃんも、なかく窓の外を見てると、お母さんが、うれしそうにいいました。」

「おばあちゃんも、楽しそうね。元気がなつたみたい」

ケーブルカーを下りて、長い参道を、ゆつくり歩いてると、突然ひいばあちゃんがいいました。

「わ、私のハンドバック」「ハンドバック？」

「ここねちゃんが不思議そうな顔を見ると、ひいばあちゃんは、『ほれ』と、道ばたの木を指さしました。ここねちゃんが、背伸びをしてみると、重なりあつた枝と枝の間にキラキラ光るものがありました。」

「ほう。カラスの巣だな」と、お父さんがいいました。

「カラスの巣？」

「そう。カラスは、いろんなものを使って、上手に巣をつくるんだよ」

お父さんが言うように、

カラスの巣は、ハンガーで作つてありました。その中に、キラキラ光るものが見えました。ピースです。

「おばあちゃん、ピースのハンドバックだよ」

「でも、どうして？」

「お母さんがいいました。カラスだよ。カラスが犯人だつたんだよ」

お父さんは、

「光るものが好きだから、それで、ハンガーと一緒に持つていったんだよ」と、いいました。

「じゃあ、カラスが、ハンドバックを盗んだつてこと？」

「そういうことだね」

「じゃあ、ひいばあちゃん、お父さんが忘れたんじゃないの？」

「確かめるように、ここねちゃんがいうと、ひいばあちゃんは、

「ばあちゃん、ハンドバックも、カラスさんの子育てに役立ったみたいだね」と、嬉しそうに、ここねちゃんを抱きしめました。

(おわり)

(さし絵・小出 茂)

### 高尾山の昆虫

## イッシキキモンカミキリ

晩夏ともなると出会うカミキリの種が少なくなつていきますが、イッシキキモンカミキリはこの時期に最盛期を迎える種として知られています。

一昔前までは西南日本に分布する稀なカミキリとして扱われていましたが、その後奥多摩でも分布が確認されたのは実に衝撃的なことでした。

奥多摩にいたのなら高尾にもいるのではとの観測は時間を経て立証され、裏高尾には本種が生息することが近年確認されています。

カミキリの造形や色彩・斑紋は多岐に亘ることが知られていますが、イッシキキモンカミキリの場合には黒地に鮮やかな幾何学的な黄色い斑紋が入り実に鮮やかで、稀少さと相俟って人気が高いことに十分納得がいえます。

私も初めて見た時に、この紋の形状が、トランプのハートやダイヤ、スペード等を連想させ、その奇抜なデザインに圧倒されました。

これはもはや人間の常識や想像を遙かに超えた自然のなせる業なのだと感心せずにはいられませんでした。

今夏もヤマグラブの葉上で素敵なフアッションを披露してくれていることでしょう。

